

職員会議で

夏休み中の職員会議では、運動会について体育部の方から計画案が出された。本校の運動会は、徒競走、選抜リレーが中心の競技会的色彩の濃いものとなっている。運動会の種目について、ほぼ例年通りに決まりかけていた時、A先生から次のような提起があった。

「私は、選抜リレーや徒競走に対して反対です。選抜リレーについては、足の速い一部の子だけが出場し、機会均等ではないことはもちろん、出ている子どもさえ、結果が伴わないと、批判にさらされ、いやな思いをする子どもがいます。多くの選択肢の中から、自分の希望で種目を選択するのならわかりますが、希望しても入れない選抜リレーは、どう考えてもおかしいと思います。また、徒競走については、足の遅い子にとって、これほどつらいものはありません。毎年、毎年、最後まで走って、おそい姿を大衆にさらすこととなります。走って、競争して順位をつけ、いつでもビリ。これでは、子どもがかわいそうではないですか。走って順位をつけることなど、同和教育という視点から言って、おかしいことではないのでしょうか。」

これに対して、本校の体育部の主であるB先生は、次のように回答しました。

「私は、選抜リレーをして、いやな思いをする子どもを聞いたことはない。むしろ、選抜リレーがあることによって、運動会は盛り上がるし、一番最後の競技なので、学校中の子どもたちが一つになれる絶好の機会です。学校では、一回出た子は、できるだけ他の子に譲るように配慮しているので、問題はない。また、徒競走については、遅い子ばかりに目を向けておられるが、中には、走ることだけが得意な子がいる。絵を書くのがうまい子、習字が上手な子、それぞれの子どもにはそれぞれの個性があり、それを引き伸ばしてやるのが、教師の仕事ではありませんか。いろんな個性があって、いろんな機会で発揮させる、そんな場を設けてやる必要があるのです。徒競走については、同じタイムの者同士が走るようにグループ分けもしています。同じ力の者同士が走るから、盛り上がります。徒競走は運動会ではなくてはならない種目なのです。」

「めあて学習」を自ら実践されているB氏の言うことに賛同しかねるが、A氏のように同和教育云々という理由のみで徒競走が批判されることにも賛同できない。なぜなら、競争を否定することは道徳の押しつけになることだし、子ども個々の態度の問題ではないのだから……。自分の立場は、一体どこにあるのか、どういう批判があり、「徒競走をなくした学校」の実践ではどのような論議があったのか、叢書、たのスポ等を開くことにした。

徒競走の論議は

徒競走そのものを否定するのではなく、運動会の競技としてふさわしいかという視点で議論されている。

I、徒競走の受け入れられる土壌について

- ・練習時間がほとんどいらないにもかかわらず、ある程度盛り上がる。
- ・父母、地域住民のニーズ（勝負がすぐにわかるショー的要素）
- ・運動会は徒競走なしでは語れないと言った固定した考え。

II、徒競走の問題点

- ・遅い子は毎年ビリだ。（能力による差別と選別。人間の序列化）
- ・練習や作戦で勝つことは難しい。
- ・やる前から順位がある程度決まっている。
- ・負けても最後まで走り通すあきらめと頑張りの精神の強調

III、そこで、

徒競走で ー①タイムレース

徒競走でなくー②障害物走にする

→③全員リレーにする

ー④障害物リレーにする

①については、記録を整理する煩雑さ、見る者にとっておもしろさが半減すると言った問題を抱えている。②③④については、徒競走を、廃止し、障害走や全員リレーに変更しているが、果たして問題点は、解消されるだろうか。偶然性を起こしやすいために、障害走にするのことは、解決策としては、消極的であると思うし、

全員リレーについては、やはり、走るのが遅い子どもにとっては一定距離を走る時間は、苦痛なものだと言えよう。

しかし、このような徒競走の見直され方は、教師集団内や対子どもとの間で真筆な議論が繰り返されたのは言うまでもなく、運動会の目標や性格を追求され、そこに近づけるための見直しなのである。つまり、「徒競走は」ではなく、「運動会は」から徒競走が検討されたのである。

徒競走のなくなるわけ

まず、「何を教えるか」が運動会で問われているのかどうかということである。多くの学校では、教える中身が先ではなく、適当に盛り上げる方が先ということ、運動会の在り方、捉えられ方そのものの問題が大きいように思われる。徒競走も含め、演技以外の種目は、適当に運動会を盛り上げるものとしか考えられておらず、教育的価値は不問とされているのではないだろうか。

運動会では、「日頃の練習の成果を十分出し切って……。」とよく言われるが、「日頃の練習」は演技を指すものと言えよう。練習時間のほとんどが、演技に費やされ、競技に費やす時間にすると言えば、入退場の練習や本番に間違わないように、自分の順番を正確に覚えるために一、二回行うだけである。短距離走の目的とする「最高スピードの持続」などは、問題とされないのである。演技だけに、時間を費やし、一方的に「やらされている」演技の代償として、お楽しみや息抜きとして（全てそうとは言い切れないが）競技が存在しているのではないか。

学校5日制のため運動会練習時間が短縮され、以前のように時間も確保できない。そうすると、時間のほとんどがますます演技に費やされ、競技は宴会の一発芸的なものとしか捉えられないだろう。教育的価値などは尚更問題とはされなくなるのである。

もう一つは、各学校の運動会の性格そのものの問題があげられる。競技的要素が強いのか、「祭り」的（または、レクレーション的）要素が濃いか。そのどこに位置するかを考えることだろう。徒競走を積極的に行われている学校は、色別対抗による点数競争中心の運動会運営になっているのではないだろうか。教師主導の運動会では、子どもがレースの駒になっている学校も少なくはない。そのどちらに位置するののかの点検が行われなければならないだろう。

運動会は

結局、A先生の主張は通らず（と言うよりは、問題とならないと言った方がふさわしい）、徒競走、選抜リレーのある運動会が行われた。運動会も例年通り、点数の競い合いで盛り上がる競技会的なものとなってしまった。盛り上がる一方で、今年も前述したような子ども達を生み出しているのである。

A先生の提起により、私自身、学校の運動会を見直す機会になったと言える。徒競走を論議することは、運動会を問うことでもあるし、その先には、運動会でどのような子どもを育てるのかを考える大きな目標がある。つまり、各学校の運動会そのものを見直すことに尽きると思う。

しかし、残念ながら、教師の意識は（私も含めて）低く、「あるものをわざわざどうして変えるのか、忙しいときに……」と論議の対象ともならないのである。

本年もどこの学校でも徒競走、選抜リレーが行われていることだろう。ほとんど練習しなくても、それなりに盛り上がるのはどうしてか、教えた事とは異次元のところにこれらは存在し、教えた中身があるにも関わらず、この盛り上がりには太刀打ちできない。教師自身も適当な盛り上がりを求め、教師のニーズに合致していると言える。そのために、徒競走、選抜リレーの論議が下火になっているとも言えるのではないか。これらの競技の持つ文化性は何なのかを改めて、考えさせられるのである。